



# 古に古まと古れ

～カインの逡巡・黒騎士紀行～

渡来亞輝彦

「あにさまー！ あにさまー！」

弟の声が明るい。

「あれなにー？」

「ねー、あにさまー！ あにさまつて

ばー！」

弟の体力は無限だ。好奇心も無限

だ。

ニンゲンの子供でいうところの、六、七歳くらいだろうか。そのくらいの大きさの弟だが、とにかく体力も好奇心も無限大だ。

かつて、彼本人から「餓鬼の世話は大変なんだ。特に小さいのはなー、加減つーのをしらんから」とのぼやきをきいたことがある。だが、きっとそれでも疲れたら寝てしまうであろう本当のニンゲンの子と違つて、大して睡眠を必要としない黒騎士である弟の体力は本当に無限大なのだ。

私は当時は子供は苦手で、裏方の方を担当していたから、ニンゲンの子供の特性など知らなかつた。知つてたら、きっともつと対処の方法があつたと思う。

「もつと勉強しておくべきだつたな」「なにがー？」

弟がいきなり隣の岩陰からひよこんと顔を覗かせる。わつと私は驚く。  
「ネザース、いつからそこに」

「今だよ。あにさま」

えへと笑つて彼は小首を傾げる。  
「なんで？ あにさまは頭いいのに、

「なんで勉強するの？」

「そんなことはない。私はものを知ら

なさすぎるんだ」

「そつかなあ。おれはもつとしらないんだ。あたまわるいし」

弟はぼやくように言つてからにこりとした。

「だからなー、ほんよんでも勉強したんだ！　あにさまみたいになりたかったからなつ！」

そんな弟の屈託ない笑顔に、私は何故かちよつと胸を締め付けられるのだけつた。

兄様みたいになりたかった。

あの時、彼が必死に難しい本を読んでいたのは、本当にそんな理由からだつたのか？

\*  
私と弟は、前線から帰るためにベースを目指していた。しかし、そもそも不審な姿の我々は味方のなかなか協力を得られず、我々二人でこのファイールドを進まねばならなかつた。

私と弟の旅する場所は、元々は戦闘用、つまりバトルフィールドとして作られたわけではなく、娯楽施設や住居

の一端だつたらしいが、今回の黒騎士叛乱により、一般市民を排除して戦場とした場所だ。

ナノマシンで作られた人工生命体というべき、戦闘用黒騎士の我々にとつて、そこはただの市街戦の戦場のような場所であつた。

が、それは大人の姿の我々の場合だ。

記憶のある私はともあれ、記憶を喪失し精神年齢も外見と同じになつている弟の場合、そこは物珍しいもので溢れた好奇心を刺激する遊び場にしかみえないらしい。

廃墟と化したそこには、さまざまなもののが残されていた。汚染されたここに住人が戻ることはもうない。残されたものは有効活用させてもらうこともある。

「あにさまー、絵本見つけたよ！」

弟が嬉しそうに本を抱えて帰つてきた。弟は探索が好きだ。

「なーなー、一緒に読もう！」

「そうだね。後でな」

「うん！」

そんな様子に私は微笑んだ。

「うん、ネザースは楽しそうで良いな」

「そうかな？」

「そうだよ」

「それはなー、あにさまと旅するの楽し

いからだよ」

そう言つて笑う弟は、どう見ても普通の子供だった。

\*

「はア？ なんて？」

控室に戻ってきた弟は、私の言葉にぶつきらぼうに聞き返す。

「なんだよ、ドレイク。なんて？」

道化師のようなコスチュームを着てい

た弟は、着替えるところだつたらしいが、私の問いかけに露骨に顔を顰めた。

「兄貴よ、アンタ、そんなこともしらねえのかよ。チツ、マジでつかえねーな。つたくトロくせえんだよ！」

娯楽施設の一角にあたる遊園地は、

我々の職場であつた。戦闘用、しかも、黒騎士としては初期ロットの我々が、なぜそんなところにいるのかというと、ありていにいうと左遷だつた。

旧型の我々は主戦力として前線に立ててもらえなかつたのだ。我々に与えられたのは、福利厚生、慰安施設であるこの遊園地の管理業務だつた。

捻くれ者で皮肉屋だが、少なくとも私は、よりはコミュニケーション能力のある弟は、ゲートで子供のナビゲーションをしたり、シヨーにも出たりしていた。

本来好戦的な彼にはこの任務は相当の屈辱だつたはずだが、意外にも真面目にこなしていた。しかし、弟はこのと

おり、私に対しては刺々しい態度が多かつた。元から態度や素行も良くない弟だが、私には特に。

仕方がない。兄弟とはいえ、材料が同じ型番のナノマシンを分け合つたというだけなのだ。ニンゲンでいうところの家族の情というものがいまいち理解できない。

「ちゃんと勉強をしろよなー、アニサマ」

などと嫌味をいいつつ、質問内容には答えてくれたものだが、嫌われているのかと思つていた。

そんな粗野な弟だつたが、意外と読書は好きだつた。電子書籍でも読んでいるのかと思つたが、控室で一息入れるときに読んでいるのは、どこからか回収してきた紙の本だつた。

勉強熱心ではあり、読んでいる本は娯楽小説から漢籍、外国語の教本、百科事典と何でもござれだつた。こちらが感

心してしまうほどだ。この娯楽施設に閉じ込められた我々の関係は、良好とまでは言い難い。私が無口なせいもあり、彼とは必要以上の会話はなされなかつた。ただ、弟は、沈黙が支配する控え室で独りごちることがよくあつた。

「まったく、餓鬼つてのは大変だよなー。無限の体力あつて、好奇心も無限だから。あれはなに、これはなにって、質問される身にもなつてみろつてもんだよ」

弟のそれは長いこと、裏方の仕事を回してもらつていた私に対する当つけかと思つていたが、今思うとアレはもしかしたら私に雑談を振つているつもりだつたのかもしれない。私が無口なのを承知の上で、彼なりに気を遣つて話をしたのかもしれない。

「今度はアレ調べてこいってさあ。つたく、今日中に調べて解答しなきやな

らねえじやねえか。あー、クソが。やつてらんねえ」

そんなことを言いながら、弟は多分子供が好きだった。

当初は任務だから仕方なしに応じていたが、途中で本当に子供が好きになつていたのだと思う。そんな社交的な彼は閑職でも充実しているように見えた。当時の私には、なんだかうらやましく眩しい気がしたものだ。

\* 「あにさま、どうしたの？」

絵本を持ったまま、弟が小首を傾げた。

「あにさま、どうしたの？」  
「ううん、なんでもない」  
「そうだといいけど。ねえねえ、あのねえ、あにさま。この絵本すごいよ。絵が綺麗なんだあ。見てみて」

弟が私を元気づけようとペラつと絵本を開く。かつての弟は、私に皮肉しか言わなかつたのに、今の弟は私をひたすら称賛して励ましてくれる。どちらが本当の弟なんだろう。

不意にそんなことを考えた。

「そういえば、ネザースは、どうして私をあにさまと呼ぶのだ？ 兄さんとが色々あるし、昔はドレイクという名がこうなる直前の戦闘で負った大怪我に

よつて完全な姿での再生がむずかしかつたこともあるのだろう。きっとそれも実験なのだろう。彼は私がどうするか、観察しているだけだった。

「あにさま？」

きよとんと弟が私の顔色を不安そうにうかがう。

「あにさま、元気ない？」

「ううん、なんでもない」

「そうだといいけど。ねえねえ、あのねえ、あにさま。この絵本すごいよ。絵が綺麗なんだあ。見てみて」

「んーとね」

「ネザアスは悪戯つぽい顔になる。

「あにさま、かつこよくてつよくて頭いいの、にいさんつていうだけだと表現でいきなさそつだろ。あにきはなんかイメー  
ジ違うし、でも、あにうえつて今どき古いよね。おれ、悩んだんだよー」

弟はにこりとする。

「で、すーごく調べて決めたんだ、あにさまつて呼ばうつて。でも人前だと恥ず

かしいからあにきにする」

そう言われて私は思い当たる節があつた。

ごく稀に弟は「アニサマ」といつて私を揶揄うようなことがあつたけれど、それは決まつて二人だけの時だつた。  
「あれつ？ もしかして、それつて、こに来る前からなのかい？」

「そうだぞー。でもなー、前はあんまりよべてなかつた。だつて、ほかのひといふかもしれないから、はずかしいだろ」

弟は楽しそうに笑う。  
「ここにきたから呼べたんだよな。だからここであにさまと旅できてよかつたー」

素直に私を慕う彼と、私に皮肉を言う彼と。彼の本心がどちらかは、私はわからないけれど。

「そうか、私もそうだよ」

私は、その言葉に救われる。

「ネザアス行こう。次の目的地まで

私は弟に手を差し伸べる。うん、と弟が答えて手を繋いでくれる。

私たちをここに残した創造主『力ミ』のことを私は怒つていたけれど。こうして私たちに子供の世界を味わうきっかけをくれたことに、私は感謝をしたいと思う。

あにさまとおれ・終

『あにさまとおれ』  
2023/2/25発行  
ペラふえす2023参加  
渡来亞輝彦  
幻想の冒険者達  
<http://ship2adoventurer.fc2web.com/>  
twitter:@fourdart

